

花里吉正の1940（昭和15）年

— ホームヘルプ事業推進者における「孝」の道に焦点をあてて —

中 鳶 洋

『中京大学現代社会学部紀要』 第14巻 第1号 抜 刷

2020年7月 PP. 85~104

花里吉正の 1940 (昭和 15) 年

— ホームヘルプ事業推進者における「孝」の道に焦点をあてて—

中 畠 洋

I. はじめに

花里吉正 (1921.1.15-2008.12.14, のちの竹内吉正, 以下, 花里) は、戦後日本の民間社会福祉事業の推進に貢献した人物のなかでも、とりわけ、わが国最初の組織的なホームヘルプ事業とされる家庭養護婦派遣事業の推進に尽力した功労者とされる (竹内 1974:51-69; 1991:14-29; 須加 1996:87-122; 山田 2005:178-98; 荏原 2008:1-11; 中畠 2013; 2014a・b; 2019:1-13 など)。花里は、21 歳時の出征以降、復員、失職、闘病、受洗などの茨の道を歩んだ後に、1955 (昭和 30) 年 7 月に自ら社会福祉分野に身を投じ、上田市社会福祉協議会 (以下、市社協) 初代事務局長 (1955 年 7 月 11 日～)、長野県社会福祉協議会 (以下、県社協) 組織課長 (1963 年 4 月 1 日～)、同更生資金課長 (1975 年 7 月 10 日～) などと栄転しつつ、ホームヘルプ事業化を推し進めたという。こうした彼の奮闘もあり、わが国の高齢者福祉分野では、老人家庭奉仕員派遣事業の国庫補助事業化 (1962 年 4 月)、老人福祉法成立 (1963 年 7 月 11 日)、老人福祉法改正法公布 (1972 年 6 月) などの法制化が進むことになった。

まず、先行研究であるが、1955 (昭和 30) 年 10 月 8 日に、花里が竹内あきと結婚した後、竹内吉正として活躍した彼の思想や貢献を注視したものが多く、例として、森 (1972:31-9; 1974)、米本 (1985:8:30)、長野県ホームヘルパー協会 (1991)、須加 (1996:87-122)、上村 (1997:247-57)、介護

福祉学研究会監修 (2002)、山田 (2005:178-98)、上田市社会福祉協議会 50 年の歩み編集委員会編 (2006)、荏原 (2008:1-11)、中畠 (2010:71-83;2012:75-85;2013;2014a・b・c:31-45;2019:1-13 など)、宮本 (2011:83-106) などがある。とりわけ、山田 (2005:194) は、花里を「当時の上田市社協事務局長であり本事業の実質的推進役であった」などと論じ、キーパーソンの一人と位置づける。また、中畠 (2014b:11-624) には、家庭養護婦派遣事業の原資料が数多く収録され、竹内による検印やら署名が多数認められることから、彼の功労が史資料的裏付けの下に整理されていると言っても過言ではない。

その一方、彼の独身時代に関し、花里吉正としてとり上げられたものとしては、信州民報社 (1955:2) や宮坂編 (1993:30-7) などの若干の資料があるのみに留まっている。前者は彼の結婚式を報じたものであり、後者は 72 歳当時の竹内 (花里) が自身の幼少期を回顧したものであるが、ここから、花里吉正としての彼の特徴を適時的かつ実証的に論考した研究は十分とは言えず、34 歳まで独身を貫いていた青壮年期の花里の思想や生活が十分に掘り下げられているとは言い難い。換言すれば、花里におけるホームヘルプ事業化への尽力や貢献は、旧来、瑞々しい感性や旺盛な好奇心が育まれることが多い青壮年期の詳細な検討を抜きにして、同事業化の促進という功労のみが照射され、概ね彼を賞賛する形で論じられる傾向にあったと言える。しかしながら、社会福祉史上に名を残す人物の功績や功労を精緻に捉え直す際、人生の飛躍や職務上の活躍の土台となる各人の青壮年期の実状や過去の実体験の具体的な把握は必要不可欠であり、彼をとり巻く時代背景や家庭事情などを併せて、具に把握しなければならない。そのためには、日誌や回顧録などの私文書をていねいに紐解き、彼の思考や感情などを、実証的かつ適時的に捉え直す必要があろう。

以上のような問題意識の下、本稿では、戦後日本のホームヘルプ事業の推進者の一人として花里を位置づけ、彼の思考や着想の基盤を形成した青壮年期、とりわけ 10 代最後の年となる 1940 (昭和 15) 年の花里の実態を

詳らかにすることを目的とする。研究方法は、2020（令和2）年4月現在において発見されている43冊の彼直筆の日誌のなかで、もっとも古い一冊である『当用日記』（1940年1月1日～12月31日、本稿では日誌Ⅰと記す）、花里の履歴書（1978年2月10日付）及び筆者作成の「竹内吉正の年表」（1886年1月27日～2009年6月24日）を主に分析・引用する。

研究課題は、1940（昭和15）年の花里に関し、①紀元二千六百年当時の時勢及び花里の決意を論考すること、②三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所（以下、教習所）勤務時代の彼の学びと「孝」の道を考究すること¹⁾、③花里と実母との関わり並びに母からの教訓を究明すること、④彼の読書及び菊地先生による助言から受けた影響を明確にすることの4点である。これらの4点の課題の探究から、ホームヘルプ事業推進におけるキーパーソンの背景思想や青壮年期の実態の一端に光を当て、優れた思想や構想の土台を形成する背景要因に具体的にアプローチする。なお、倫理的配慮としては、花里関連史料の引用許可並びに研究の範囲内での公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た（2009年10月3日）。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た（中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認）。

Ⅱ．紀元二千六百年の時勢と花里の決意

上述の通り、花里日誌として保存されている最古のものが日誌Ⅰ（1940年1月1日～12月31日）であり、同日誌内の記述は、1940（昭和15）年元旦から総じて几帳面といえるほど整理されている。この頃の花里は、大阪松坂屋に勤務していた父親の死後、母親、兄妹とともに名古屋に身を寄せる暮らしを余儀なくされていた。同年は奇しくも紀元二千六百年という節目の年であり、全国社会事業大会が開催されたり、社会事業が「厚生事業」に改編される一方、日独伊三国軍事同盟が調印されるなど、軍国調の風とともに社会が動乱状況にあった。こうしたなか、新春を迎えた花里は、以下のように論述し、自身が思う理想に向かって邁進しようと思念す

る。

紀元二千六百年の新春。祝福すべき紀元二千六百年の春は明けた。わが大日本帝國は神武天皇建國以來二千六百年。もしそれ天照大神が群神を率ひて農耕蚕織を勧め給うに太古よりすれば實に悠遠である。この悠遠な年所は、不壊の信念と一貫の理想とを以て發展してさらに光輝を加へた。わが萬世一系の國體と、八紘一字以て世界平和の進運とに貢獻する國とは、既にこの昔に確立したのである。我等はこの光輝ある國に生を享け、この眩古の盛運に際會して、遙かに天祖の遠猷を仰ぎ、神武建國の皇業を尊ぶと共に、この洪範を紹述發展せしめられた歴代の遺烈を想ひ、陛下の穰威と恩澤とを仰ぎ感激措くところを知らぬのである。今次の事変は、わが國の發展と併せて、支那滿州等隣邦の福祉をはかり、東亜の康寧の樂士たらしめ、延いて世界の平和が寄與せんことを目指す点に於て、眞に開國以來の大事業である。「迎年祝世」は新春の御題であるが、わが國民は、この慶祝すべき春を迎へて、皇室の萬歳を壽ぎ皇國無限の發展を祈つてこの大理想に向つて邁進せねばならぬ。(日誌Ⅰ：1940年1月1日、傍点筆者)

上記の「神武建國の皇業を尊ぶ」「陛下の穰威と恩澤とを仰ぎ感激措くところを知らぬ」「皇室の萬歳を壽ぎ皇國無限の發展を祈つて」などから、花里が天皇を中心とする國家のあり方に概ね賛意を示しているのが解読でき²⁾、一方で、それは必ずしも武力や圧力などの戦闘によるものではなく、傍点部の「わが國の發展と併せて、支那滿州等隣邦の福祉をはかり、東亜の康寧の樂士たらしめ、延いて世界の平和が寄與せんことを目指す」から、世界平和に対し、福祉の充實を通じ、寄与することを重視する彼の認識を汲み取れる。このことを實現すべく、彼はその小さな一歩として、在籍していた教習所での学びや勤めにいっそう奮闘しようとする。

Ⅲ．三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所勤務時代の花里の学びと「孝」の道

（1）三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所内での授業及び本科就学中の第一計画

宮坂編（1993:30-7）でも、花里の教習所勤務時代は詳解されていないが³⁾、日誌を紐解くと、その実態の一端が垣間見れる。彼が中学卒業後に上級学校に行かなかったのは、花里家が父の死後、一時期、母子家庭・多子家庭という経済的問題に直面していたからであり、いち早く、独立・自活を目ざそうとしたためであった。こうしたなか、花里家の次男として教習所で奮闘していた彼は、まず、その年の仕事始めを以下のように論ずる。

一通の種々の人々に年頭の挨拶を述ぶ。室全員は無事にて出勤した。七時四十分全会社従業員は年頭始業式を挙行す。所長、式辞中に本年は二千六百年の奉祝と共に、軍需に促はる我等は、一層の努力、熱、汗を以て業務に精進せられん事をのぞむと。自分も共に本年は大いに張切るべきと誓った。又勉強も寸時を大時と考へ、大いにすべきと思った。（日誌Ⅰ：1940年1月6日）

上記から、花里の教習所での任務は、日誌の記述に基づくと、明らかに軍需の促進であったことが示唆され、激化する戦時下日本社会において、花里は寸暇を惜しんで勉強しようとし、「金属材料」「微分学」「熱分析」「工作法」「金相学」「英訳」「顕微鏡」「高数」など、様々な理論や技術を学んでいる。さらに、日誌を紐解くと、その具体例が幾つか窺え、その一例を挙げると、「朝、男一番と云ふ處で起床。金属材料缺陷の勉強をやった。仲々難し。感ず。勉強せよ。努力せよと。午後兄、正兄、潔君は参考書『微分学』を買ひに出た。自分は昨日出て、ニュース映画を見たので今日は止めた」（同：5日）、「朝から大川技師の室にて熱分析、試験の熱天秤試運転した。一條さんの助手として働く。参考書等読む。勉強すべきだ、勉強す

べきだ。東條技師に応召下さる。日の丸に署名した。奮起した。又緊張を感じず。定時にて帰る」(同：11日)、「教習所にて工作法試験あり。十問題出たが、五問題一時間にすべき旨の處、四問題しか手がとどかず、一番後まで残ったが、増田講師はもうよいからと取上げた。心残りしたが、之れで良くも悪くも全課目完了した。以後、最早自ら定めた、金相学、英譯、顕微鏡、高数の勉強に精進するのみなり。不言実行すべきなり」などと記され(同：3月8日)、彼は多くを語らず、ひたすら勉強に努めようとしている⁴⁾。

一方、「教習所始業す。第一時限高数は、孝の道を説かれた武田先生で、何か心から尊敬すべき先生と感ず。第二時限、物理は立松先生。時間中、青年学校卒業と我等の学力とに就て、話されたが、之れに生徒の大なる反抗的意見が強く出た。業務は極めて暇気分で、その割に進まず」などと記述し(同：1月8日、傍点筆者)、とりわけ、傍点部から、「孝」の道を説いた武田先生から少なからず影響を受けていたことが分かる。さらに、「最後の本科であるこの努力が尊いのである。最後の一分間なり。大いに勉強すべきである。負けてたまるものかこの際に第一に計画を立てた。一、本科就学中は他方面に出でて就学せずこれに専心す。一、中学出身者中の一位を以て卒業せよ。一、全員中の席次一〜五以内に必ず入るべし。であった。先づ実行が第一手段なり」と(同：5月1日)、より具体的に目の前の課題を設定した花里は、目標達成に向けて精進していく。

(2) 松永先生による「修身」講義と大いなる勉強

上記から、「孝」の道について考察し始めていた花里は、1940(昭和15)年1月15日、「教習所にては、武田講師歛せられ、二時間続けて修身講師松永先生の講義あり。一時限は先生、山岡鉄舟先生に就きその偉大なる剛健さを話さる。その中铁舟は、何時何處の如何なる者が尋ねても、心よく又丁重に接待せられたとの事であり、又往生の模様等聴取したが、色々と関係ある亡き父の事を惟ふと、それに似通ふ点が多く思はれ、大いに教

えられた。…（中略）…今年は二十歳の紀元二千六百年である。何か、大なる一生涯に立派な足跡を記すべきだと信じた」などと（日誌Ⅰ：1940年1月15日）、山岡鉄舟と亡き父とを重ねながら考想し、修身を学び、山岡鉄舟の偉大さに感嘆しつつ、こうした講義を通じ、成人に至る紀元二千六百年を熟思する⁵⁾。教習所内でこうした刺激を少なからず受けていた花里は、日々の日誌内でも「勉強せねばならない。自分の将来の偉大なる目的に向って邁進すべきだ。…（中略）…目的に邁進すべきだ。大いにやれ」（同：6月24日）、「Maximum temperature 32℃ 何と云ふ感激であろう。大いに勉強せよ。月が護って下さる。青年だ。秋迫ったのである。勉強せよ。勉強せよ。と自然の力は教へて呉れる」などと（同：8月21日）、自分自身を叱咤激励し、大きな目的に向かって大いに勉強することを旨とする。

加えて、「午後三時から治学の方面を学ぶ為、図書館に赴く。七時半頃まで、non-metallic inclusionに関する重要記事を筆記した。生れて初めての図書館入りで、めずらしくもあり、又屢々来館して学励すべきと思ふ」などと（同：1月26日）、図書館での勉強を始めたことを明かしている⁶⁾。但し、勉学の道程はやれば即結果に結びつくというほど容易なものではなく、「勉強は計画的で無い為、勉強すべき處に到達せず。常に計画して置いたのが、一方ばかりに片やる為、出来ないものであった」などと（同：11月5日）、計画性に欠けた勉学に苦闘している様子が看取できる。このことを証する記述として、以下があり、成績が振るわないことに加え、「何事をやっても自分はどのようなのであらうかと実にいやな気持ちになり、どうなる事かと残念至極である」と大いに落胆している。こうした不甲斐ない自分自身に対し、ここでの彼は神仏に縋ろうとする思いさえ抱く⁷⁾。

教習所の試験にて結果を思ふに、全く悪成績であつた。自分では充分良しと確信して居たのであるが、思ふに直ぐ出来る處であるが、何故あそこを気付かなかつたのであらう。努力は充分と云ふに、一寸時に於て

又、全力を画するこの試験、最後の勝敗を決するこの重大失敗に來し考查結果が又もや、落第点と云ふのである。全く残念でならず又、何事をやっても自分はどうしたのであらうかと実にいやな気持ちになり、どうなる事かと残念至極である。人事を画して天命を待つとやら諺に合するかどうか、何か神佛におすがりしたい気持ちになった。(同：11月12日)

このような逆境に至り、自身の力能を十全に發揮できなかったことに悔やんでも悔やみきれないほど落胆していた花里は、神仏への帰依により現状打破を模索しようとし、さらに、ここでは、「帰途、暗夜、天を睨みて吟ずるに、少年老易、学成難、一寸光陰不可経云々とあるが、吟ずるのみに之れを体して居らぬ形なり。自分中心より遺憾とする處なり。正富先生の御教訓にある『生命掛けの勉強をせよ』と反省するのである」などと(同：12月2日)、猛省し、勉強に対する姿勢の甘さを自戒し、生命掛けの態度で勉強しようと決意する。

(3)「孝」の道への邁進と母への危惧

時として、こうした不調のなかでも、相当の覚悟をもって勉強しなければならぬと再認した花里は、苦手科目が少なくないなか、「力学」に興味を抱く。それは、「今日を以て教習所力学が終った。藤野さんの明敏な授業は愈々今日を以て終りをつけ、以後はないのだと思ふと何か物足りない気がする。又、感謝に堪へない感じだ。先生が『僕の授業は今日で終ります』と云はれた時、皆一同、思ひ合せた様に『有難う御座いました』と謝辞の言葉を交はした。誰もが感謝したのである。全くその熱心な御教授に対し、心から感謝の誠をいたすのである。自分は力学が面白く思ふ様になったのであるが、残念だ」とさえ記すほどであり(同：12月30日、二重鍵括弧内ママ)、学科終了という一区切りを残念にすら思っている。

但し、ここでも彼は「力学」という内容のみならず、日々の授業の理解・習得に加え、「孝」の大切さを熟考し、「休暇も今日で終る。長いと思った

のも矢の如く、豫定通りの仕事も出来ず過した。以後は、思ふ善を確信し、実行し、今日の目的『孝』の道、松澤先生、武田先生のあの『孝』の道に邁進するのみなり」などと（同：1月5日、二重鍵括弧内ママ）、一日の目標を定めながら、改めて「孝」の道を希求する。さらにその約1ヶ月後には、それが具体的にどのような道を歩むことなのか論及され、彼の内面においてそれが徐々に明確になっているのが以下から窺い知れる。

紀元二千六百年紀元節なり。昨夜遅く、朝の豫定行動実施出来ずして、七時起床。先づ身を潔め、神前に親拜、佛前に参拜、九頭龍様に詣でた。この佳節、この紀元二千六百年を期し、自ら確く誓って決した誓文を神佛に確く誓った。一、孝の精神を『此處までしかこの日記は記入してなし。後日反省して綴る。誓文は六ヶ條であったが、事実こんな處で書き終って居る様ではその精神があやぶまれる。結局、根本精神は忠孝を第一義とすに存するのみなり』（同：2月11日、二重鍵括弧内ママ）⁸⁾

ここから、「孝」の精神を日誌への記述を通じて肝銘しようとした花里は、自らの日誌の記述が不完全なことを諫め、「忠孝」を根本精神とし、日々精進しなければならないと念願している。反面、それはけっして他力本願ではなく、自力打開であることが重要であり、そのことを彼は母親の忠告からも学んでいたことが以下から窺える⁹⁾。

今日感ず。何時しか母上が云はれた如く、自分に掛る心配や難問題は結局自分の力でして行かねばならぬもので、之れが一番完全な又安全なる道と、云はれたが全く尤もと感ずる点あり。如何に他人が心配したと云っても、それは参考となるものの一小部分に過ぎて、その終局は自力打開、打破に外ならないと痛感した。今後は如何なる事あるも兄と協力、打破の外はない。（同：1月7日）

一方、花里は、時折、母親と論議することもあったといい、「帰宅後団欒の際、母と経済問題につき相談したが、菊池先生の訓された如く、兄と共に主張したが、母と意見に変ずる處あり。母も我等の云ふ事を変に見られ少しいかられた。が、我等は家を思ふ一心から出た言葉であつた」と記し（同：3月6日）、「しかしよく考へた末、後悔の止むなきに到つた。例へ自分達がある底（ママ）度正しくても、平重盛の場合とは全く異なる。何と云つても母に心配掛ける事は不孝になる。大いに後悔した。此處まで自分達は本当の孝を知らないものだ。まだまよふ處あり注意すべきものだ」などと（同）、母親に心配をかけることこそが孝に反することであり、自分自身は真の孝というものに近づかなければならないと自省する。

加えて、「終日、家の経済的問題が頭から去らず、陰気であり、又重苦しく、疲労を感ず。母の御心配されるのも大いに身体に影響する處あるのは、之れを以てしてもよく理解出来る處であつた。この事ではいけないと知りつつも業務に専心出来難し」などからも（同：7月9日）、母親の病状を心配する一方で、自分自身の教習所内での勤務にもなかなか専心できない窮状を吐露している。

IV. 花里における読書と菊池先生の言

こうした専心没頭できない状況下において、勉励や「孝」の道を重視した花里は、他方、「教習所、飛行機学で興味ある又、面白いお話し即ち、航空母艦の事、成層圏飛行の事があつた。勉強、智識、整理するもの多し。業務は乾板焼付けに來られた。面白い話しが続出した。正午、黙禱、特に海軍将士の英靈に対し、又御活動されて居られる将兵の武運長久を祈願した。本日こそ、大日本海海戦勝その日である。この為、他方面では大催しがあつた」などと記し（日誌Ⅰ：1940年5月27日）、いよいよ戦時体制下での動きを察知し、戦況の激化を予測する。さらに、成人になる1940（昭和15）年には、徴兵検査を受けなければならず¹⁰⁾、彼はとりわけ、健康面に留意すべく、以下のように論ずる。

今年は二十歳、愈々来年は徴兵検査なり。而して同縣人の松本君は肺病にて、知多半島の療養所へ。又潔をも帰省せしめたる處等、大いに注意せねばならぬ様になる。最近堀君は西山さんから健康診断を受ける様に云はれた。自分も中学入学以来、診察を受けた事なく、検査の迫るに順ひ、大いに感ずる点あり。此處に歛勤してまでの健康診断を受ける事となった。九時、堀君と約束に依り、市民病院に赴く。…（中略）…母、家庭の暗い氣持を直す様、感激あふる様な教訓された。今日の診断の出来たのも、經濟上に苦しき為、正兄に借りて、出来たので大いに勉励せよ、大いに働けの念がわく。（同：18日）

ここから、母親からの感激し得る教訓を受け、大いに勉励し、働こうと念じた花里は、日々の努力を怠らず、まず一日の第一歩として、当時の日課であつた早朝のラジオ放送を聴取している。「最近早朝のラジオにて朝の音楽と共に早朝講話なるものが各方面の指導者により話されて居る。さて今朝は『自分の楽しみは自分のやって居る事に存在せねばならぬ。而して、ここに存すれば発達もし、能率的でもある』と云はれた。ここだと思つた。自分の最近まよつて居たのは皆、ここにあるのだと思つた。自分のやる業務、勉強をする事が一番の楽しみにあらねばならぬ。これでなければ上達せぬと云はれた。全く感じてしまひ、今までの自分の考へが余り違つて居たのに後悔した。この楽と共に自分の前途に向つていくべきだと痛感した」などと記した箇所からは（同：8月22日、二重鍵括弧内ママ、傍点筆者）、自分がやることが楽しいと思えることこそ尊いと認識し、ラジオの講話からもヒントを得ている。

また、休日には、「昼間は日光浴並びに読書に耽る」などと論じ（同：10月17日）、思索や熟思を怠らず、①職業は生活の方便ではない。生活の目的である。働くと言ふ事が、人生の価値であり、人生の歡喜であり、人生の幸福である、②無為な生活を廢して、全力を竭して生き給へ、必ず慰めが其處に在す、③成功の方法は必ずしも之れを知るを要せず。能く事

の為すべきことを知りて、全力を之に傾倒すれば足れり、④人を相手とせずして天を相手とせよ。天を相手にして己を画し、人を咎めず。我誠の足らずる事を尋ぬべし。大いに感じた。次いで世界文学集の一頁を読み、又釈迦物語を読んだ(同)、の4点を想起し、職業の意義や天を相手にすることを悟っている。こうした熟考を通じ、当時の花里は、「臥薪嘗胆、教習所勉強に懸命にならねば我、目的達成は断じて望めない。最近我れの行動何ぞや。如何ぞや、今日の如きは何ぞや。反省する時、何ぞや。(自己を思ふ)」などと(同、丸括弧内ママ)、臥薪嘗胆の心持で、自戒する。

他方、1940(昭和15)年9月9日の日誌内には、母親の教訓と菊地先生の言との間の齟齬を逡巡し、「朝早くから母が起きて居られた。いや寧ろ夜中起きて居られて昨夜、菊地先生からの自分からの答とも云ふべきものに就いて、苦慮された事を思ふ。時々こまりはてて、一人で云晴れる言葉は、菊地先生の言はれる心持と、根本的に相違があった。母と先生の考へ方は、いずれが正しいか、将来の事、各方面の事を静かに思ふに先生のお考へが正しいと信ず。兄もそうである。その結論は経験上に於ける母のお考への反省、自重、自覚にあるのみである。この事は、以前より感じて居たが、これが正しいか否かの境の断がつかず、今日まで迷って居たのであるが、これを確信する時が、今来たのである。今日一日中、この方面の話しには、一歳(ママ)触れず、会社では忘れて懸命に働いた」などと(同：9月9日)、勤労の一方で、様々な忠告や訓示を思い出しながら、思索を深めていた¹¹⁾。

この自問自答において、菊地先生に分があると認めた花里だが、「云ったものが反して居り、自分は菊地先生から云はれたものを話したのであるが、母は大いにいかられる處もあった。自分は何も口が出せなくなった。それと云ふのは自分の考へに根拠なるものがなく、又人の話しをそのまま云った様であるからで自分の考へを堅くせねばならぬと思った。大いに感ずる處有り」などと吐露し(同：10月31日)¹²⁾、論拠をもち得るように自身の思考の鍛錬がそもそも必要であると認めるに至っている。加えて、

「人は自己を省ず、他に反省を促したり、注意したりし強だ。自分は之れを知って居る。月、良し。人影は餘りにも明示される。詩を吟じたい。菊地先生の云はれた言葉、次男吉正君は一生懸命勉強せよ、に従ふに努力す。しかし一寸もやろうとする事は出来ない」などと（同：11日、傍点筆者）、花里家の次男として立身出世するための方法として、一生懸命に勉強することであると認識するに至っている。

V. まとめ——考察と今後の課題

以上、本稿では、1940（昭和15）年の花里の思考や生活実態を、彼直筆の日誌『当用日記』（1940年1月1日～12月31日）及び履歴書・年表などを紐解きながら検討した。紀元二千六百年の新春に際し、社会で真剣にやるべきことは何かと自問自答した花里は（日誌Ⅰ：1940年1月3日）、1939（昭和14）年4月に入社した三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所での勤務を通じ、微分学や熱分析といった工学の基礎知識を習得しながらも、とりわけ、力学に興味をもち、結果的には航空機製造という形で軍需産業にも携わっていた¹³⁾。但し、その反面、それは単に戦争で勝利を挙げることのみならず、事変の結果、「隣邦の福祉」による世界平和を見据えたものであり（同：1日）、さらには、そこには母親に心配をかけること、父親以上の人物になること、家庭経済の問題を軽減することなどを含む「孝」の道への探究が見られた（同：1月5日；2月11日；3月6日など）。また、教習所内での成績が振るわなかった自分自身を大いに叱咤し、臥薪嘗胆の気持ち忘れずに、計画的に勉強することの重要性を認識し、“勉強”という文言を日誌内で多用することで、「生命掛けで勉強せよ」という教訓を旨としていたことが明確になった（同：12月2日）。

今回、1940（昭和15）年の花里の生活実態を日誌の記述から辿ると、のちの彼が着想することになる家庭養護婦派遣事業（ホームヘルプ事業）の組織化との直接的な関連はまだ十分には捉え切れないものの、一時期、母子家庭・多子家庭であった花里家の生活状況と、家庭養護婦の派遣対象

家庭の暮らしぶりが近似していることに類似点を見出し得た。加えて、「わが国の発展と併せて、支那満州等隣邦の福祉をはかり、東亜の康寧の樂士たらしめ、延いて世界の平和が寄興せんことを目指す」という箇所に（同：1月1日）、戦闘による抑圧や統制のみならず、「隣邦の福祉」をはかることによる世界平和を志向した点が、在宅での福祉を充実させるべく、のちのホームヘルプ事業化の推進による各在宅生活者の安寧・安定に寄与しようとしていたことと近接していたことが認められた。「菊地先生の云はれた言葉、次男吉正君は一生懸命勉強せよ、に従ふ努力す。しかし一寸もやろうとする事は出来ない」などという率直な心情から（同：10月11日）、迷いや挫折なども体験していたが、少なくとも、日々の勉勵を重視し、自分が掲げる大いなる目標に向かって精進しようとする彼の姿勢を看取できた。こうした努力の姿勢や試行錯誤が、のちのホームヘルプ事業の組織化の推進という、彼の着想をもたらし得た思想基盤の背景要因の一つに含まれていたと結論づけられた。

本稿では、2020（令和2）年4月時点で可能な範囲内で、花里の思想や生活を遡及し、戦前の、とりわけ青壮年期の花里が経験した様々な事柄を日誌分析から捉え直し、日本社会の発展を民間社会福祉事業の進展から後押ししようとした取り組みの土台を、花里思想の展開から把握した。のちに花里が、長野県社会福祉協議会会長、同民生員協議会会長、上田明照会会長らから表彰されたことも、彼の功労の大きさを物語っている。戦前と戦中の戦時体制下とを同一視点で捉えること自体に限界があるものの、わが国の在宅福祉・地域福祉の扉を、ホームヘルプ事業の組織化という観点から推し進めた花里の着眼の背景要因は、その羅針儀の役目を果たしていた遠因の一つという点でも注目されよう。なお、今後の課題は、1941（昭和16）年の花里の思想や生活を探究すること、並びに終戦間際の彼の闘病生活や苦悩を詳らかにすることである。

注

- 1) 1934（昭和9）年に創始された名古屋航空機製作所の沿革については、名古屋航空機製作所25年史編集委員会編（1983:2）に詳しい。
- 2) その他にも、「興亜奉公日、式典は例の如く、国歌合唱、宮城遙拝皇軍将士に対する感謝の黙祷、所長発聲の教育項頌に終る。昼食は日の丸弁当を美味しく戴く」などにも（日誌Ⅰ：1940年4月1日）、花里の心境や心持が窺い知れる。
- 3) 教習所に関しては、「大正5年（1916）ころからスタートした日本の航空機工業30年の歴史に終止符を打たれた日である。その時、旧三菱工業（株）の航空部門は、機体関係6製作所、発動関係11製作所を持ち、名古屋を中心に東は静岡から西は九州熊本に至る各地区事業所を散在させ、かつ、転換工場、疎開工場、学校、地下、半地下工場等の分散工場を含めると100以上を数えていた」とされる（名古屋航空機製作所25年史編集委員会編1983:1）。
- 4) 花里は、「夜、寒川先生と四人総って栗屋重役宅に赴き、年頭の挨拶方々雑談して、八時半帰宅す。省るに、自分は社会に出て、もっと真剣でやるべき点のあるのに痛感した。今日御宅を訪問して、之れを深く感じた。昭和十五年初頭出勤日より緊張、努力、真剣さを以て、大いに邁進すべきだと思ふ」（日誌Ⅰ：1940年1月3日）、「今日も一日暗室に籠り、high speed steel-test piece microscopy 結果よりした。Photomicrography 焼付を実施した。乾板撮影不良の為か、うまく行かずして、時間ばかり掛る。これで終ってしまった」などと（同：5月7日）、日々自省する。
- 5) 他方、花里は、「教習所にて松永先生より、中学出身者は、特に以後、勉勵を要する旨の訓話と忠告あり」という文言に刺激を受ける一方（日誌Ⅰ：1940年1月25日）、「（松永）先生の訓しの中に『人間は希望を持て、希望を持ち抱くものを青年と云ふ。年老いたると云へ、希望を抱ものを称して青年と呼ぶ』とある。大いに反省された又感ぜさせられる」からも（同：12月9日、丸括弧・二重鍵括弧内ママ）、多くを感受している。
- 6) 「暑い暑い日であった。風があったからよいものの、誠に暑かった。本多博士の

身上の御話しを『婦人之友』誌上で読んだ處、人間は知識、人格、健康が大切である。勉強に際しては、充分基礎を鍛鍊して、常に『熟考而努力』をモットーとせよとあった」などにも（日誌Ⅰ：1940年6月9日、二重鍵括弧内ママ）、恩師、本多光太郎の教えを再認しつつ、熟考・努力を重視した当時の竹内の生き方が見て取れる。

- 7) 花里の業務や学びは骨の折れるものが少なくなく、「材料力学の久し振りの御講義であった。仕事は現場関係のものが沢山あるのでこれをやる。三村技師から云はれ又自分も釣られて同感になったのであるが、plastic deformation の件、自己研究としてやって居るが、仲々うまく行かず、残念ながら撮影するまでには行かずに長らいで居る」にも（日誌Ⅰ：1940年12月4日）、日々、苦戦する花里の一面を看取できる。
- 8) なお、花里は、「謹ミテ総裁宮殿下ノ死去ヲ哀悼シ奉リ恭シク弔辞ヲ奉呈ス 昭和四年一月二十八日 財団法人聖徳太子奉讃会特別委員 花里吉次郎」などと認め（日誌Ⅰ：1940年1月28日）、同日付の日誌内に、「父の文を読み、懐しくも又、父以上、世に立派に立つ人物にならねばならぬと思ふ」と（日誌Ⅰ：1940年1月28日）、父親を越えるような人物にならないと肝銘している。
- 9) 他方、『『實の麥は頭下る』との母の諺を思い出した』にも（日誌Ⅰ：1940年4月11日、二重鍵括弧内ママ）、彼が母親から受けや教訓や躰の一端が窺える。
- 10) 徴兵に関し、「最後の交し話した。一條さんも入隊真ざわで、気持も大分はしゃいで居られた。心臓も大分強かった。色々今後の事につき話し合った。『元気でやって下さい。しっかりやって来て下さい』と上前津で別れた」という文章にも（日誌Ⅰ：1940年2月19日、二重鍵括弧内ママ）、竹内が感得していた危機感の一端が見て取れる。
- 11) また、「菊地先生のお話しの中にあつた。人はある一時を楽しみ、これを常に持つて楽しみにする。しかしこの楽により人物に又その人を作るに当って害するが如きでは絶対にならないと。自分は映画が好きである。音楽が好きだ。この機に大勝館で未完成交響楽、別れの曲を鑑賞するのも無意味ではないと思ひ堀君

と共に定刻後出掛けた。良かった」にも（日誌 I：1940 年 10 月 7 日）、楽しみや好きなことが人物形成上、マイナスになることはないという菊地先生の言にも理解を深めている。

- ¹²⁾ この当時の花里は、「朝、便所に入った時、大便しつつ考へさせられ又感激した。即ち『はい』が下から不意に上って来た。常なら打ってしまふのであるが、その『はい』は今、殻から出たばかりの新生の『はい』であった。足をこすり手をこすり大氣に遊び飛ぶ日の朝だ。『はい』は踊り出しさらに活潑な動作を出した。あのうっから出たのだが、立派な翼をつけた立派なる『はい』となる。自然の力は実に偉大なるものだ。全く偉大だ。自分は害虫なるを忘れて、見とれて居た」などと論じ（日誌 I：1940 年 9 月 1 日、二重鍵括弧内ママ）、彼は日常生活場面においてさえ、思索する姿勢を崩していない。

- ¹³⁾ 因みに、1921（大正 10）年～1945（昭和 20）年 8 月までの間に、名古屋航空機製作所では、機体部分の総生産数 1 万 7,660 機（うち、陸軍関係 7,664 機、海軍関係 9,996 機）という実績が残されている（名古屋航空機製作所 25 年史編集委員会編 1983:3）。

付記 本稿は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：基盤研究（C）19K02172、研究代表者 中寫 洋）の研究成果の一部である。

史 料

花里吉正（1940）『当用日記』（1940 年 1 月～1940 年 12 月、本稿では日誌 I）。

石田梅岩（1935）『都鄙問答』岩波書店。

三菱重工業名古屋発動機製作所（1938）『研究報告』1（1）。

宮坂亮一編（1993）『和を以て貴しと為す——花里家の記録』花里吉見。

日本弘道会（1899）『日本弘道叢記』日本弘道会事務所、（88）。

大森重蔵（1943）『三菱重工業株式会社名古屋発動機製作所研究報告』6（5）。

佐倉孫三（1893）『山岡鉄舟伝』普及舎。

信州民報社（1955）「簡素の中に心からの祝福」『信州民報』第 2085 号、1955 年 10

月 8 日, 第 2 面.

高木豊治 (1943)『航空技術教程 第 8 版 三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所
所訓育課技能係改訂』三菱重工業名古屋航空機製作所訓育課.

高瀬真卿 (1886)『孝の道』近藤東之助.

山岡鉄舟 (1940)『武士道 改訂版』大東出版社.

山岡鉄舟 (1942)『鉄舟随感録』秋田屋書店.

文 献

荏原順子 (2008)「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6), 1-11.

菱光会 (1970)『往事茫茫——三菱重工名古屋 50 年の懐古』.

介護福祉学研究会監修 (2002)『介護福祉学』中央法規出版.

上村富江 (1997)「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房, 247-57.

名航 50 年史編さん委員会編 (2007)『三菱重工名古屋航空宇宙システム製作所五十年史』三菱重工名古屋航空宇宙システム製作所.

三菱重工 (1967)『新三菱重工業株式会社史』三菱重工.

三菱重工業株式会社史編纂室編 (1956)『三菱重工業株式会社史』三菱重工業.

宮本代代 (2011)「わが国の訪問介護事業生成過程に関する一考察」『四天王寺大学大学院研究論集』(6), 83-106.

森 幹郎 (1972)「ホームヘルプサービス」『季刊 社会保障研究』8 (2), 31-9.

森 幹郎 (1974)『ホームヘルパー』日本生命済生会社会事業局.

長野県ホームヘルパー協会 (1991)『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』.

名古屋航空機製作所 25 年史編集委員会編 (1983)『三菱重工名古屋航空機製作所二十五
年史』三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所.

中畠 洋 (2010)「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本の地域福祉』(24), 71-83.

中畠 洋 (2012)「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日本の地

域福祉』(25),75-85.

中寫 洋（2013）『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい.

中寫 洋（2014a）『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美.

中寫 洋監修（2014b）『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会.

中寫 洋（2014c）「草創期における家庭養護婦派遣事業と家庭養護婦」『社会事業史研究』(45),31-45.

中寫 洋（2019）「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60（3）,1-13.

大森曹玄（1968）『山岡鉄舟』春秋社.

須加美明（1996）「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2（1）,87-122.

竹内吉正（1974）「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』(46),51-69.

竹内吉正（1991）「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会20年のあゆみ』第一印刷,14-29.

上田市社会福祉協議会50年の歩み編集委員会編（2006）『住民と共に歩んだ50年』上田市社会福祉協議会.

牛山栄治編著（1968）『山岡鉄舟の一生』春風館.

山田知子（2005）「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大學研究紀要 人間學部・文學部』(90),178-98.

米本秀仁（1985）「北海道におけるホームヘルパー史——制度の動向と協会活動を重ねあわせて」『北のホームヘルプ活動』北海道ホームヘルパー協会,8-30.

